

2006年5月26日

日本郵政株式会社
代表取締役社長 西川善文 殿

社団法人日本建築学会
会長 村上 周三

東京中央郵便局庁舎・大阪中央郵便局庁舎保存要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴下におかれましては、東京中央郵便局庁舎（1931年竣工）と大阪中央郵便局庁舎（1939年竣工）の取り壊しを計画しておられる旨うかがっております。

ご承知のように、この2つの建物は、日本近代を代表する建築家・吉田鉄郎（1894-1956）の傑作として有名なもので、戦前の日本における近代建築の代表例として、建築史上高く評価されております。

この東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、以下の点で保存すべき建物と考えられます。

1) 戦前の日本における近代建築の中でももっとも優れた建築のひとつである。

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、東京と大阪の「中央郵便局」としてそれぞれ東京駅と大阪駅（梅田駅）前の1街区を占有するかたちで建設されました。窓口業務だけではなく、郵便や小包の集配・仕分け業務、現業員の宿直・厚生施設、オフィスという複合業務に対応することを意図して計画されたものです。駅に隣接しているのはそれに対応するためですし、集配のためにトラック輸送の便を考慮しているのもそのためです。それらは、いわば裏まわりの機能ですが、それだけではなく、一般向けの窓口業務があり、しかも「帝都」と呼ばれた首都東京と「商都」と呼ばれた経済都市大阪のそれぞれの駅前に建つ「中央郵便局」ということで、威厳の表現も求められたと思われま

す。当時過去の建築様式を使って立面を整える方法が有効性を失いはじめ、その一方で、やがて20世紀の建築の主流になる近代（主義）建築がヨーロッパから導入されはじめていました。このような威厳重視のフォーマルな建築を設計する場合、そのどちらを採用するかについては議論の余地があり得ましたが、設計者の逓信省経理局

営繕課（担当：吉田鉄郎）は、最新のデザインを選択しました。それは前例がほとんどない点で困難をとまなう選択でしたが、吉田鉄郎は、それを克服し、細部まで神経の行き届いた巧みなデザインでまとめ上げました（詳細は別添の「見解」参照）。どちらも竣工直後から、当時の建築家に絶賛されています。それは近代（主義）建築によって、威厳を巧みに表現して見せたと評価されたことによるものです。東京中央郵便局が竣工して1年半後に来日したドイツの建築家ブルーノ・タウトが、この建物を日本の新建築の代表として高く評価したことはよく知られております。その後も、この2つの建物は日本の近代建築史の中では、戦前を代表する傑作として高く評価されてきました。

2) 日本近代の代表的建築家・吉田鉄郎の傑作である。

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は逓信省経理局営繕課が設計しました。逓信省営繕課は当時の日本の建築界をリードした有名な設計組織で、近代（主義）建築を日本に導入するのに主要な役割を果たしました。吉田鉄郎は、山田守（1894-1966）と並んで、その設計陣のリーダーで、当時の日本の建築家たちが称賛する建物を数多く設計しました。その作風は、機能を重視し、本質的な要素だけで立面を構成し、細部まで破綻のないデザインにまとめ上げるというもので、全体に、シンプルで、気品を感じさせる立面を特徴とします。

また、ドイツ語に堪能であり、学識の深さでも知られ、日本の建築文化や庭園について、ドイツ語の著書による海外への日本文化紹介のパイオニアでもありました。その性格の高潔さとあいまって、建築界から深い尊敬を集める存在でした。

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎がその吉田の代表作であるのは、衆目の一致するところです。

3) 駅前の景観を構成する重要な要素になっている。

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、「帝都」や「商都」の顔としてつくられ、その後駅前景観を構成する重要な要素になっています。それは、昭和初期を偲ばせる貴重な建物であるとともに、駅前景観がどうあるべきかについての示唆を与えてくれる貴重な事例としての存在意義も両建物には認められます。

以上のことから、貴下におかれましては、東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎の文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。なお、本会はこの建物の保存に関して、できうる限り協力させていただく所存であることを申し添えます。

敬具

東京中央郵便局庁舎および大阪中央郵便局庁舎についての見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 吉田 鋼市

東京中央郵便局庁舎（1931年竣工）と大阪中央郵便局庁舎（1939年竣工）は、いずれも日本近代を代表する建築家・吉田鉄郎（1894-1956）の傑作として有名なもので、戦前の日本における近代建築の代表例として、建築史上高く評価されている。

以下、それぞれの庁舎の特長を示し、両庁舎に共通する事項を中心に、日本における近代建築の代表例としての評価をおこない、また、設計者である吉田鉄郎の建築史上の評価を示すこととする。

1. 建物の特長

(1) 東京中央郵便局庁舎

東京中央郵便局庁舎は、中央郵便局機能を果たすための最新設備を備えた建物として、東京駅前に1929（昭和4）年8月15日に起工し、1931（昭和6）年12月25日に竣工した。設計は逓信省経理局営繕課（担当：吉田鉄郎）、施工は大倉土木株式会社（現・大成建設）である。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造5階建て地下1階建てで、塔屋付きである。外装は二丁掛けタイルを一面に張っている。東京駅南西側の1街区を占有し、延床面積36,637.1㎡の、当時としては大建築だった。

この建物の設計に際しての与条件は、窓口業務・郵便集配業務・オフィスという複合機能に対応しつつ、台形状（変形五角形）の変形敷地に、首都（当時の言い方では「帝都」）の「中央郵便局」としての威厳をどうやって表現するかということだったと考えられる。

敷地は東京駅丸の内駅舎南西側の1街区全部で、それはすべての立面が見られる存在になることを意味する、そして、駅前広場に面するというので、それは首都の表玄関に建つ「中央郵便局」ということになるので、威厳ある立面にすることが求められるが、連続する壁面の長さがきわめて長くなり、しかも敷地形状が変形であるため、通常の手法ではそれをうまく処理できないという問題がある。

このような課題に対して、設計者（吉田鉄郎）は、まず広場側（東側の短辺から、斜辺、広場に正対する北辺、西辺）を5階建てで揃えた。ちなみに、南側は集配機能に対応して大空間を設け、高さは3階建てにした。

広場に面した正面になる5階建ての壁面には、辺ごとにまとまりを与えた。具体的には、北面では、中央に窓口への大玄関を設け、その上に大時計を配し、この軸を中心に左右対称に縦4列に窓を並べた。そしてその両端には縦長の窓を縦一列に配して、そこまででひとつの完結した立面とした。その辺と斜辺とが交わる角には、別に玄関

を配し、その両側に縦長窓を一列配して、ここでも左右対称の構成をつくっている。そして、その右側の縦長窓 1 列（北面の端部）が角の左右の縦長窓と同一モチーフでオーバーラップするかたちで、北面と斜辺を関係づけている。つまり、長大な

壁面をいくつかグルーピングし、それぞれを左右対称で構成し、それらの各部分が端部の要素を共有して少しずつオーバーラップするかたちで連続するという立面構成になっているのである。左右対称は、中央郵便局としての、また首都の表玄関前の広場に建つということでの「威厳」を表現するためで、それは各窓両側に張り出したシンプルな柱型によっても表現されている。それらの壁面のところどころには柱型ではなく平らな壁面で処理した部分（細い縦長窓が並ぶ部分）を設け、立面が単調に陥るのを防いでいる。一見さりげないが、細部に至るまで周到な配慮が払われているわけである。

また、窓の高さを上階に行くほど少しずつ小さくし、さらには 4 階と 5 階の間に水平に胴蛇腹を入れて、立面全体に簡潔性を与えている。しかも、その窓の高さはその後ろの室の機能にも対応している。つまり、1 階は窓口業務などに対応するため高い天井（窓の高さもそれにあわせてある）だが、最上階は吏員宿直室などにあてられるため天井高は低くてよい、というこの建物のあり方にもうまく対応しているのである。

このように、この建物では、きわめてシンプルな手法を用いながら、「威厳」を表現し得ており、しかも長大な立面を冗長にしていない。

当時は近代（主義）建築が日本にも導入されはじめた時期である。近代（主義）建築は、合理主義を基盤とし、内部機能と立面の関係を重視し、過去の建築様式などの装飾に頼らず、抽象的な要素である線や面の構成によって美をつくりだすというもので、やがて 20 世紀を代表する建築になった。この建物は、日本におけるその初期の例でもある。近代的なシンプルな手法で、「威厳」を表現して見せた点が、しかもむずかしい設計条件の中でそれを実現した点が高く評価される。それは設計者の非凡な才能をよく示すものである。また、この建物竣工の 1 年半後に来日したドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）が日本における新建築（近代主義建築）の代表として絶賛したのも当然といえる。

(2)大阪中央郵便局庁舎

大阪府大阪市北区梅田 3-2-4 に所在する本建築は、1936（昭和 11）年 3 月に起工し 1939（同 14）年 3 月に竣工した鉄筋コンクリート造地上 7 階建て地階を有する建築で、延床面積 25,565 m²の大規模な郵便局舎である。設計は逓信省営繕課で同課技師の吉田鉄郎が担当した。施工は清水組（現清水建設）による。

1 階は窓口業務のための一室大空間で、大阪駅前に向した東面中央に主要玄関を配し、南東隅にも出入り口を設けている。西側は郵便荷物の積み降ろしのための集配車両発着場に面する。上階は諸業務の執務空間である。

柱梁からなる架構をそのまま反映させた外観と、全面を覆うタイル、スチールサッシュによる大きなガラス開口は良好に維持されており、内部は業務内容の変化や利

用者対応のために一部改変されているものの、1階客溜まりも往事の雰囲気をよくとどめている。

本建築の意匠上の価値は、前項でもふれたとおり、柱梁からなる架構を外観に明快に反映させることによって合理性の美を生みだし、それによってモダニズムと日本の伝統を統合した点にある。同建物の立面においては、水平要素である幅の狭い腰壁(スパンドレル)を柱型よりも後退させ、

この柱型が地面から5階の軒まで途中で遮られることなく伸び上がり、各柱の存在感と連続した規則性が強調されている。東京中央郵便局では各柱の頂部が同一面において水平に連結され立面全体として櫛形をなしていたから、この点が類似も多い両者の意匠の、しかし根本的相違を象徴する箇所である。

平面においては南東角に隅切りが施されており、それがファサードである東立面の対称性を乱している。これは都市計画上の要請によるもので、おそらく設計者の意図としては、ファサード全面を柱と腰壁による均等な格子で構成することが想定されていたと思われる。柱と梁に囲まれた矩形全面をガラス開口とすることによって、日本の伝統的木構造である真壁造(柱が壁面に露出する和風木構造)の現代的解釈が表明されている。

1階から5階までの各階高は必要に応じて変えられているが、それはスチールサッシュ1段分を単位として、下階から5、4、4、3、2段という比例で割り付けられている。さらにこのサッシュの縦横の棧の位置や庇の厚みまでもが、約210×60ミリ目地幅約7ミリのタイル割付けに揃えられている。すなわち同建物の立面は、タイルを最小単位とした厳格な規則性の上に成立しているのである。こうした設計方法は、先に引用した設計者の言葉にあるように、制約、つつましさ、控えめ、倫理性といった価値意識から導かれるものであり、そこにモダニズムと日本の伝統に共通する美を見いだそうとするものであった。

タイルやスチールサッシュは耐久性のある材料として近代建築に多用されたが、その後大版パネルや部材寸法の大きいアルミサッシュに置き換えられたために、当時の面影が失われた例も多い。そうでない場合もこれほど徹底した全体的整合性を備えた類例は少なく、今日良好な状態で残る1930年代の良質のモダニズム建築として、本建築は希少価値の高いものである。

2. 評価

(1) 日本における近代建築の秀作としての評価

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、いずれも日本における初期モダニズム建築の代表的な建物として評価される。

東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎の立面は、いずれも装飾を排除し、柱の位置や窓の大きさと形状に規則性のある設計がなされ、モダニズム建築特有の意匠となっている。モダニズム建築は、線、面、量塊、という造形要素の組み合わせによる抽象的な立体物としてかたちづくられることを特長とするが、東京中央郵便局庁舎で

は、街路に面するそれぞれの立面をひとつの面として表現し、大阪中央郵便局庁舎では柱・梁という線の組み合わせによってかたちづくられる立面の組み合わせによって建物全体をひとつの量塊としてつくりあげている。そして、両者ともに、外壁を日本の伝統的木造建築に見られる真壁造に見立ててつくっているところに、日本の伝統的建築の持つ「美」を新しいモダニズム建築に取り込む工夫がなされている。この点は、欧米のモダニズム建築には見ることでできないものであり、世界的に高く評価されている。

すなわち、東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、いずれも、日本が世界に誇りうる新しいモダニズム建築として、日本における近代建築の秀作であり、高く評価できる。

(2) 建築家・吉田鉄郎の傑作としての評価

設計者の吉田鉄郎(1894-1956)は、日本近代を代表する建築家として知られる。東京帝国大学建築学科を1919年に卒業し、直ちに逓信省営繕課に勤務し、逓信建築を中心に優れた近代(主義)建築をつくりだした。彼や、同僚の山田守のもとで、逓信省の建築は日本の新建築をリードする存在として昭和初期には高く評価されるようになった。また、それを生み出した逓信省営繕課という建築設計組織は、1920年代30年代を通じて日本におけるモダニズム建築の発展を牽引した。吉田は、その総帥として、「現代建築の様式は、個々の建築の機能、材料、構造等から必然的に生ずる建築形態を最も簡明に表現することによりて定まる」という理念をもち、いわば「モダニズム建築の旗手」として日本の建築界に存在していた。東京中央郵便局庁舎と大阪中央郵便局庁舎は、その理念を実現した建築であり、彼の建築作品の中でも最高傑作として、竣工後から今日に至るまで、一貫して建築界から高い評価を受けている。

このように東京・大阪の両中央郵便局は、吉田の代表作であると同時に日本のモダニズム建築の昭和戦前期における到達点を示すものでもあるが、両者の間には吉田のモダニズム建築思想のさらなる深化の軌跡が認められる。すなわち、大阪中央郵便局庁舎においては国際的モダニズムの設計理念を適用しただけでなく、その上に日本建築に見られる木造の明快性を重ね合わせることで、設計の合理性とそこから生じる美を統合的に実現した点である。

その背景には、日本建築の本質に対する吉田の建築家としての洞察と理解があった。それは、吉田がドイツ語で著しドイツで出版した3冊の著書(“Das Japanische Wohnhaus”, 1935、“Japanische Architektur”, 1952、“Der Japanische Garten”, 1957いずれもドイツのヴァスムート社から出版)でも展開されている。ドイツ語に堪能であった彼は、これらの著作を通じて、日本の建築や庭園を海外に紹介した。このうち“Japanische Architektur”は1952年度の日本建築学会賞(著書)を受賞したが、その結語において吉田は次のように述べている。「規格化は早くから実施され、建設過程の単純化と迅速性を目指した。しかしこのことの中には、日本人が制限された型の中でつましく彼の個性を発揮するために、型に従うことがまた表現されている。建築

家の小我はそれで制限され、日本の建築はあの落ち着いた、控えめな、倫理的な美しさを発展させることができたのであった。この日本建築の特性は、恐らく日本ばかりでなく、他の国々の新しい建築にも、道を示すことができるであろう。ここに表明された日本建築の特性は、同時に吉田自身の設計理念でもあった。それは、吉田がヨーロッパの近代建築に学ぶ精神的遍歴の末に到達した日本独自の近代建築のあり得るべき姿であり、大阪中央郵便局庁舎はその理念の実現として、日本のみならず世界に誇ることのできる「日本のモダニズム建築」として大きな価値を有するものである。

(3)景観上の評価

東京中央郵便局庁舎は「帝都」と呼ばれた首都東京の玄関である東京駅の駅前に建てられ、東京駅（1914年竣工）、丸ノ内ビルヂング（丸ビル、1923年竣工）、鉄道省庁舎（国鉄本社ビル、1938年竣工）などとともに、東京駅の駅前広場を構成する存在である。また、大阪中央郵便局は、日本の経済の中心地であり「商都」と呼ばれた大阪の玄関である大阪駅の駅前に建てられ、大阪鉄道局

（1928年、設計：清水組）阪急ビルディング（1929年、設計：阿倍美樹志・伊東忠太）第3代大阪駅（1940年）とともに、大阪の玄関を構成する存在である。両庁舎ともに、それぞれの都市の「顔」として存在した建物であり、かつ、それぞれの都市そのものが、日本の首都であり、また、経済の中心地であることを勘案すると、いわば、「日本の顔」として存在している建物である。

ところが、東京中央郵便局庁舎の場合、丸ビルや鉄道省庁舎はすでに取り壊されており、関東大震災の復興によって首都として発展していく東京の玄関としての状況を伝える存在は東京駅とこの東京中央郵便局庁舎しか存在しない。

また、大阪中央郵便局庁舎の場合、1920年代後半から30年代初頭にかけての大阪は、市域拡張や工業生産増大を背景にした御堂筋の拡幅や大阪市営地下鉄の敷設など、都市改造の象徴的な存在のひとつである。この時期に続く1930年代、大阪駅周辺には大阪鉄道局（1928年、設計：清水組）阪急ビルディング（1929年、設計：阿倍美樹志・伊東忠太）第3代大阪駅（1940年）などが相次いで建設された。なかでも大阪駅を挟んで対峙する阪急ビルディングと大阪中央郵便局庁舎の姿は、大都市の玄関口にふさわしい偉容と格調を備えた都市景観として広く市民に親しまれてきたものである。

以上により、東京中央郵便局庁舎と大阪郵便局庁舎は、いずれも、それぞれの都市における玄関に位置し、その「顔」として都市景観を構成する重要な存在である。



東京中央郵便局庁舎



大阪中央郵便局庁舎